

2024 年 1 月 31 日 水曜祈り会

吉田真司

本日の学び テーマ：「良い羊飼いのもとで」 テキスト：ヨハネ 10 章 7 節-18 節

【理解の手がかりとして】

ヨハネ 10 章には「羊飼い」に関する一連の内容が続く。本日の箇所に入る前に、関連のある 1～6 節の「羊の囲い」のたとえも押えておこう。「はっきり言っておく（アーメン、アーメン、わたしはあなたたちに言う）」という語り出しで始まるこの部分（ヨハネ福音書だけでも 25 回出てくる）はイエス様の特徴的な言い回しである。この言葉が出てくるとき、私たちはひと際自分の注意を喚起しなければならない。

「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。」(10:1)——パレスチナでは、一つの村の羊は共同の囲いに入れられている場合が多かったようである。その共同の囲いの門番は、顔見知りの「羊飼いたち」だけに門を開き、「羊飼い」は門から囲いに入り、自分の羊の名を呼んで、多くの羊の中から自分の羊だけを牧草地に連れ出す。羊も自分の羊飼いの声を聞き分けて、その人だけについていく。それに対して「盗人や強盗」は、夜ひそかにやって来て、塀を乗り越えて囲いに侵入し、羊たちを奪っていく者たちである。

「自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。ほかの者たちの声を知らないからである。」(10:4-5)——自分の羊たちをその名で呼んで囲いから連れ出した羊飼いは、「先頭に立って群れを導き」、命を養う牧草や水のあるところに連れて行く。羊たちは彼の声に導かれ後に従って行く。決して「ほかの者」（いつわりの指導者）にはついて行かない。羊は強度の近視だそうで、よって呼ばれる声に対する注意力がひととき強いのだろう。

「イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。」(10:6)——ここで「たとえ」と訳されている語は、他の多くの箇所で「たとえ」と訳される単語とは別の、「謎」を意味する単語が使われている。末尾に「彼らはその話が何のことか分からなかった」とある。彼らとは「ファリサイ派の人々」であるが、その彼らはパレスチナの羊牧の常識は良く知っていたと思われ、決してこの「羊飼い」と「羊」の関係が「何のことか分からなかった」わけではないはずである。要は、イエス様がなぜこの場面でこのような話をするのか、その意味するところが分からなかった、いや正確には分かろうとしなかった、分かることを欲しなかったのである。「自分は見えている（分かっている）」と自負する者たちの傲慢がここにある。これはまた近視（見えないことを知っている）の羊たちとは対極の不従

順（聞こうとしない）である。

さて、ここからが本日のテキスト。7～10 節を読むと少しばかり理解が難しい。と言うのは7 節で、イエス様は御自身のことを「羊の門である」と言っておられるのに対し、8 節「わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である」と言われる場合には、「わたし（イエス様）」は前段（1～6 節）の内容を直接受ける「羊飼い」のことを言っておられように思われる。それは 10 節においても同様。ところが、その間に挟まれた 9 節では、またはっきりと「わたしは門である」と語っておられる。つまり、この 7 節から 10 節までの箇所では、一節ごとに「羊の門」と「羊飼い」というたとえが互い違いに出てきているわけである。それで注解者の中には、7 節と 9 節は、後になってから加えられた説明であろうという人もいる。そのように考えて、7 節と 9 節を飛ばして読めば非常にすっきりする。

しかし、それであっても「わたしは羊の門である」と言われるイエス様の言葉を軽んじるわけにはいかない。いやむしろ「羊の門」の意味について深く考察するべきである。それでは「門」とは何か。・・・それは 10 章 1 節にあるよう「羊の囲い」に入るための唯一の入り口である。「羊の囲い」はあらゆる脅威から守られる安全地帯であるがゆえ、それは「命の門」と言って良いかと思う。その門を出入りする者は命を養う「牧草」(9 節)にあやかる。※この牧草が囲いの中にあるのか、それとも囲いから引き出されて牧草地へ連れて行かれるのか不明瞭。「門を出入りして」(同)とあるので、いずれの可能性も残る。ただこのことは二義的な事。重要な事はイエス様こそが私たちにとって救いの唯一の門であられ、その門を出入りする（その名を信じて生きる）時、「牧草」（命の糧）を頂ける、ということである。

一方、「盗人・強盗」とは、自分こそ羊の牧者だと自称し民をあざむく偽者を指しておられる。それはこの時のユダヤ教指導者（ファリサイ派）らを痛烈に批判する言葉であっただろう。

11 節以降、ここからは「羊の門」に関する言及は一段落し、「羊飼い」に関する言及に一本化される。しかも「良い羊飼い」に関してである。では「良い」とはどのような意味なのか。それは「羊のために命を捨てる」（11 節）程に羊を愛し抜く羊飼いの生き様である。いや正確には「死に様」である。世間一杯にも「良い指導者」とか「悪い指導者」という言い方があるが、その指導者に対する良悪の評価は、民に対するその命の懸け方によるのであろう。「狼」という存在を前にして自己保身で羊（民）を見捨てて逃げ去るか、それとも命を張って守るか、それが「良い羊飼い」かそうでないかの分かれ道である。

ある神学者はこの「狼」のことを、「人間の存在を脅かす『死』『虚無』『罪』」と言っている。それは人間の力では抗いようもない、羊の無力ではどうしようもない「悪魔的な力」である。この理解は先に述べた「対ユダヤ教指導者」という読み方を超えて更に深めさせられる。その「悪魔的な力」に抗い、勝利出来る「良い羊飼い」は、他でもないイエス様ご自身であることを、ここで明確（「はっきり言うておく」）に啓示しておられるのだ、というように。

イエス様は、その「羊の囲い」や「羊の一群」を、従来「神の民」と呼ばれたイスラエルの民に限定しておられない。16 節で「わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かねばならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れになる」と言われている。ここでイエス様は明確に、当時律法で差別され排斥されていた人々（9 章で癒された盲人やその他の罪びと）や異邦人たちを念頭に置いておられる。イエス様は、全世界の人間の救いについて語っておられるのである。そしてその救いのためにご自身の苦難、十字架の死を覚悟しておられる、その「受難予告」がこの箇所なのである。

『聖書教育』より

「私たちとイエスさまとの関係性や、私たちがイエスさまによって生かされていることに、改めて思いを馳せたいと思います。」（大人クラス）